

寸評

マスコミと「政治」—— アラブ革命とベルリンの壁の崩壊

情報技術 information technology は政治を変へる。その生々しい事例を、第二次世界大戦後、我々は眼の当りに見せつけられてきた。こゝでその2例を挙げておかう。

第一の例は、Sony のポケットラジオの出現である。値段が格安で電池さへあればどこでもラジオが聞け、しかもシガレットの箱のサイズ、シャツの胸のポケットにもはいる。それ以前、ラジオを電気のない僻地で聞くには発電機が必要だった。だからラジオを聞くのは余程の金持か有力者に限られてゐた。従って、沙漠のオアシス等でラジオを聞くのは殆んど不可能だった。Sony のポケットラジオの登場は、ナセルのエジプト革命前後のアフリカや中近東のモスLEM圏に激震を起した。^{*} それはこれ等モスLEM地域のどこでも、ラジオによってナセルの演説を聴けるようにしてゐた。文盲の多いこの世界でもコーランの言葉であるアラブ語のスピーチは聞いて、理解し、共鳴できる。これがナセル後のモスLEM社会に自覚と独立志向に火をつけたのだ。モスLEM各地域で独立運動が続発した。

情報技術が政治地図をぬりかへた事例である。(新聞、ラジオに次ぐ事例と云へようか。)

モスLEM圏では、コーランとともに現地の言葉は大きく後退しアラビア語にとって変られた。3000年以上の文明を誇るエジプトさへ、古代の母語は忘れられアラブ語に変はってゐた。旧いエジプトの言葉を(変化しながらも)残存させたのは(エチオピアに生きのこった)コプト語だけで、これがシャンポリオンのヒエログリフ解読に当ってロゼッタ・ストーンと共に役立った。

中世キリスト教圏のラテン語と同じく、モスLEMの地域では、コーランに使はれた聖なる言葉、アラブ語が広く通用する。アフリカや中近東にあって、この圧倒的なアラブ語が優位に抵抗し得たのは古来の高文明を誇るペルシャ(イラン)丈だった。

かうした訳で(北)アフリカや中近東では、ナセルのスピーチが燎原の火の如くアラブ各地での独立運動を駆り立てたのである。

第二の例はTVの衛星放送である。地上波のラジオやTVなら、(法令による禁止の他に)妨害電波で人民が聞けない或は見られぬようにすることができた。事実ソ連や東側の国々では、「西」からのラジオやTVをcatchできないように(法令以外に技術的に)にしてきたのである。「東」にとって「西」の豊かさと自由は絵空事、宣伝と云ってすまずことができた。しかしTVの衛星放送が始ると、これを妨害することはできない。西のTV放送を見てはならないと法令で禁止しても、少し電気に強い者の手にかかるとう西からの衛星放送のTVをこっそり見る事を止められない。実際東欧とくに東独やハンガリーなどでは、西のTVを見る者は少くなかった。そして東西の生活水準の格差、生活の豊かさの違いが、最早隠しようもない事実として、ジワジワと多くの人々の間に知られるようになる。かうした東欧の事情がやがてはベルリンの壁の崩壊、ソ連の終焉への途を開いたのである。第3次世界大戦なしにソ連崩壊はあり得ないと思へたのに、事実は小説よりも奇であった。これこそITの底力を見せ付けられた歴史的場面でもあった。

脚注

- * ポケットラジオは安く、又電気の来てゐない所でも役に立つものだった。
-

07 10 26

失敗こそ成功の鍵 ((評論))

(含：日本の原子力)

話を、産業革命初期のUKでの事情から始めよう。

当時、蒸気機関は産業革命の牽引車であった。それ等への需要は高く、ロンドン（等大都会）の下町の町工場は鉄の鋳物で造る蒸気機関の生産に大車輪で働いて居た。大きくて（複雑な）鉄の鋳物造りは（まだ技術が未熟で）難事業だった。出来上がった機関は高圧の水蒸気の為、テスト運転で爆発することは日常茶飯のこと。飛び散る鉄片は町工場の壁だけでなく、隣の貧家を壊したり、そこに住む（又は働く）人々を殺傷したりもした。当然、被害を受けた隣人は町工場に（高額の）保障を要求する。しかし、しがない町工場の主人には（自分の損害も少くない上に）保障金を満足に支払ふゆとりがない（さう云ふ工場主が大部分）。かうして紛争頻発。

そこで頭のいい男が考へ付いたのが傷害保険の制度である。多くの工場主から毎年（か一定期間）少しずつ保険料を拂はせる。塵も積れば山。沢山の clients を得れば大金が集る。これを有利にマネタリングして増やす。もし蒸気機関がテスト中爆発して傷害事件が起れば、十分な補償金を拂へると云ふ仕組である。

今なら、火災保険に、健康保険、etc, etc. と色々あるが、かうした保険の始まり（の一つ）が、蒸気機関のテスト中の事故だったのだ。かうして小さい町工場も安心して働ける。隣人も町工場に「危いから僻地に移れ」と云はなくてすむ。事故による紛争も激減。

成功した「保険制度」は色々な新型を生み出してゆく。保険会社が、又親の保険会社に保険金を拂って、自らの財政的安全を保証してもらおうとする。だからこそ（第二次大戦迄）は欧米の保険会社の top の top に UK のものが君臨して居たのだ。

蒸気機関や産業革命に必要な機械類は徐々に改良をとげ、複雑・精巧なものとなり、それに応じて町工場から、大きな精密機械工場が造るものへと集約されて行く。

新しい技術に基づく機器は、複雑・多岐なものからなる。原子力船や原子力発電は現代の例である。まだ技術は確立してゐないし、運用期間

も短い。従って技術者が何と云はうと、今尚発展段階のものである。

技術的・工学的に完成されたと看做されたジェット旅客機でさへ、屡々思ひがけない事故が起る。その意味で、必要な部品が多く、computer system も今尚未熟な現在では、「進化」の途上にあるのが航空機製作である。

原子力発電も全く同様。思ひがけない事故があって当たり前。事故がスリーマイルやチェルノブイリのように大きくならず、小さいものですむよう心掛ける以外に方法はない。完全に安全な機械なんて、神様でない限り、出来る訳がない。それを承知の上で、出来るだけ安全な機械を造ること。そして不幸にして事故が起っても、モノとヒトへの被害が出来る丈小さい様にしておくこと、それが我々ヒトに出来る最良のことである。

原発の当局者が事故を隠蔽するのは許されることではない。しかし小事故をやたらに騒ぎ立て報ずるマスコミももっと冷静にならないといけない。発展途上の技術に基づく機械に事故はつき物だ。多くの事故や失敗を教訓に技術が進化するものだからだ。

明治以来、完成した（と思はれる）技術や機械を輸入して「文明開化して来た日本」の人々は「科学や技術」についての根本的な理解が足りない。自力で大きな技術革新をなしとげた経験が（殆ど）無いからだ。

今から大部前の原子力船の時も、アメリカの技術を直輸入したが、日本の「専門家」に原子核物理の常識がなく、USA の設計の甘さに気づかず、事故や放射能もれがあると、マスコミも政府も大騒ぎをする。マスコミの集団に囲まれてのテストでは当事者達は落着いて仕事も出来まい。あがって仕事をすれば、しなくてもよい（手順等の）失敗もする。失敗すればマスコミの批難の大合唱。こんな状況下で落着いたテストや仕事も出来る訳がない。原子力船のケースは正にこんな有様だった。

環境問題、とくに CO₂ 発生、を考へれば、これ以上火力発電を増すには問題があらう。

それにも増して心配なのは 1945 年以來の日本人の平和惚けである。それに日本人の（特にマスコミと役人の）多くが科学嫌ひか科学音痴であることだ。食糧の自給率は 45% 位に減ったし、石油・石炭は 100% 輸入である。1945 年以後、地域的な紛争・戦争はあったが、幸にして大戦は無かった。しかし世界が平和であり続ける保証は何処にもないし、テロによる大惨事が起らないといふ保証もない。何時、我々日本人が食糧不足やエネルギー（石油）不足に見舞はれないとも限らない。1945 年以前と違って、今や日本はどの都市にも高層ビルが林立して居る。停電したら高層ビルのみならず、普通の住宅でも冷蔵庫が使へず、etc, etc. で大困りであらう。

その上、日本ではこの頃、贅澤に慣れ過ぎた。電車・汽車・オフ

イス・デパート、・・・、家庭で夏の冷房、冬の暖房、夜の照明をもっともっと節約する必要がある。20世紀前半の戦時を知る Y にとって、近頃の日本の浪費は度を超してゐると考へる。貧しい“後進国”のことをもっと察しなくてはならない。

日本の石油備蓄で、火力発電を半年維持できるのかどうか知らない。今の日本において、どんなに世界的大事件が起って石油の輸入が長期的に止ったとしても、今の電力の1/3は供給し続けないと、大層困ったことになる。そのためには、未熟であっても、原子力発電に頼る以外の途はない。賛否両論に曝されてゐる「原発問題」において、この世界の平和が今尚不安定であること、食料や石油の輸入が長期的に途絶える可能性が0でない（Yはその可能性が小さくないと恐れて居る）こと*を考慮して、論議してもらひたい。Yは、今の所発電量の1/2～1/3を原発に頼る他、日本が安心して長期的に生きてゆける途はない、と信じてゐる。しかし、これを、心から、残念な選択と思って居る。世界のこれまでの状況は、日本にこれ以外の選択肢を許さない。それが冷い世界の現実である。

注

* 第一次石油ショックの時の日本人の大騒ぎを想起してほしい。

二国間（イタリア・日本間）国際交流の素晴らしい事例

1994 年 Fubini Fest Symposium 出席のため Milano へ行った時、見聞きしたこと、即ちイタリアー日本の文化交流の素晴らしい事例については是非述べたい。（Fubini Fest Symp.については Fubini, 列伝抄、でもふれた）。

Fubini Fest Symposium は Milano 郊外山の中腹の旧貴族の Manchion で開かれた。僕（や何人か invitee）はこの同じ Manchion に宿泊し、朝食や夕食もこゝの食堂でとった。夕食が終ったころ、2~3 人の日本の若者が急いで食堂にとびこんできて最後のおそい夕食をとった。Yは何をしているのかと聞いた。彼等はここに宿泊していてイタリア料理のコースを受けてゐる最中だといふ。驚いてよくよく聞いて見ると、10 人の日本の若者がイタリア料理の特別コースを受けてゐるとのこと。

イタリア政治の文化交流の一環として、往復旅費と 1 年間滞在費つきで日本から 10 人の若者をよんでイタリア料理の習得のコースを用意している。そこへ応募してイタリアへ来ている連中に出会った訳だ。評判を聞きつけてこのコースに応募して、選抜に成功してここへきたといふ。

彼等はまづ 1(~2 ヶ月?)のイタリア語の特訓があり、ここ Milano 郊外のこのマンションで数ヶ月のイタリア料理の特訓をうける。これらに半年かかる。料理のコースには料理の先生が 3-4 人居て、1 級と 2 級のシェフの免状持ちである。残りの半年はイタリア各地の有名レストランに配属されて、更にきたえられてから日本に帰国する。

この先生の中の一人はイタリア料理の 2 級シェフの日本人だった。若者にあった翌日、この日本人にあって更に詳しい話をきいた。勿論この日本人は自費でイタリアに来、レストランをいくつか廻って腕をみがき、2 級のシェフとなった人である。そして今は 10 人の日本人の為の料理コースに登用されて働いているのだといふ。さうして来年には帰国して東京のイタリアレストランで働くつもりとのこと。

日本は今やグルメブーム。イタリアやフランスの料理のシェフを目指す若者は一杯いる。大部分は自費でイタリアやフランスにゆき料理の勉強をする。このご時世に、イタリア政府の scholarship でよんでくるなんてイタリア(料理)大好きな若者にとって正に魅力的な素的な project であると云へる。

この project が 10 年つづけば 100 人の若者がこの project の恩恵を受け、帰国して日本の 100 のイタリアンレストランで働くことになる。

さうでなくてもイタリア好きの連中へのこの Italian Governmental Project for Italian Cuisine への宣伝力も見のがせないものであろう。

政府の文化政策の一つとしては、Italian Gov.にとって10人/年の scholarship for young people は安い出費である。しかしイタリアンクイズンを宣伝するには絶大な after effect をもつであらう。全く大安で効果満点の project だ。

フランスや UK 等ヨーロッパの国々も少額なのに大層気のきいた、そして日本のような“文化”後進国に絶妙に喜ばれ、after effect のよい効果的 culture project をいくつももっている。

それに対し日本政府の文化政策は石頭の役人（或はそれに迎合する学者の多く）が作り相手（先進国であれ後進国であれ）のことをよく忖度し得ないせいか、稚拙（国際的に通用しない）な日本的発想より、独りよがりでお金をうんとかけるにも拘らず、相手から左程歓迎されない（時としては軽蔑される）場合すら少くない。近頃の日本政府出資の外国からの技術研修生を日本の工場などで cheap laborer としてつかふのがこの頃（2006年11月末）のニュースをわかせてゐるのなぞは氷山の一角にすぎない。悲しいことだ。それ以上には日本政府の無能ぶりに tax-payer としては腹が立つ。もっとしっかりしてほしい。

ついでにのべるが、鑑真和上の特別展がフランスはパリで実現したとき、多くの見物客が集った。この時パリの新聞は鑑真和上の来日の経緯を紹介すると共に、彼が来日にあたって、佛教の弟子のみならず、佛典等書籍、絵画や画工、工匠、建築士、瓦焼き職人 etc etc の「文化」の one whole set をひきつれて日本に移住し、大陸最新の学問、宗教、文化・技術のパノラマを日本にもたらしたことを高く評価した。この鑑真方式こそ「文化」の総体的な交流(鑑真の場合は「文化」の全体輸出)の模範とすべき顕著な例であったと説く。正に、日本政府の独りよがりの当局者が心して耳を傾け、実施に移すべき論点であった。

JAICA のかなりの（多分多くの）project は、天下り役人が超高級で project の top に当然のように座り、短い年月後に高額の退職金を受け取るものに悪用されてゐる。しばしば無知無能無経験の（しかし悪智恵と尊大さだけは発達している）天下りのお偉いさんが、全く不適當な横やりを入れたり、相手国の不良官僚や悪徳商人とくんで水戸黄門様ならこっぴどく罰するような金もうけをはかる。他方現地の実務担当をする民間からきた科学者や工学者、良心的 volunteers, etc. は天下り連中よりずっと low salary で、物知らずの天下りの top や上役にこきつかはれる。かくして tax-payer の払ったお金の大型無駄遣いが横行する。しかも無駄づかいひで天下り悪徳退職役人や商人のふ

ところはずしりとふくらむ。 OECD の援助の project でも同様であって、これらに大鉈をふるひ、その会計検査は国の検査だけでなく、良識ある民間や taxpayer の check が絶対に必要である。

エピソード (エッセイ) ～early 1960's CERN にいたときにきいた：～

★ フランス人からきいたこと

フランス人は法律で禁止されてゐないことは何でもやるが、*)
ドイツ人は法律の許すことしかない。

★ イタリアの友人の言

イタリア人が一人でゐると歌ふ。二人でゐるときは… (忘れた)。イタリア人が三人集まると、いかに上手に税金のがれをしたかを自慢しあふ。

交通違反でポリツァイにつかまったとき (driving してゐるとき) イタリアのドライバーは交通標識 (又は信号) は見てみましたが、貴方がおられるのに気がつきませんでした (或はおられるのを見てみませんでした) と云ふ。

★ フランス人の曰く

ドイツ人の家の台所や料理道具 (鍋) はきれいでピカピカだが、料理をつくらないし、つくってもまづい。フランス人のはとてもきたないが、素敵にうまい料理をつくる。

オランダ人はきれい好きで家の中をピカピカにみがき上げるだけでなく、入口のドアの取手までもピカピカにみがいてある。

*) さう云へば、1950 末～1960 初めころパリの古い建物 (の外壁) のあちこちに「18**年の法律*條によりここは立小便厳禁とか落書禁止」と大書してあったのを思ひ出す。